

〔学会〕 第1006回 千葉医学会例会
第1内科教室同門会例会

日時：平成12年1月29日（土）8:30~17:35

場所：ホテルサンガーデン千葉

1. 腎サルコイドーシスの1例

塚原常道, 家里憲二, 長谷川茂
山本駿一
(千葉社会保険・腎内科)
中村広志, 石井 浩 (同・内科)
木村邦夫, 森 義雄, 西荒井宏美
(同・健康管理センター)
伊藤一茂 (同・透析科)

急激な腎機能低下を来し、サルコイドーシスとの診断に至った1例を報告した。腎生検像では、間質にびまん性に広がる肉芽腫が形成され、本例での腎機能低下の主因は、肉芽腫形成性間質性腎炎と考えられた。副腎皮質ステロイドの投与により、腎機能および尿管機能の改善が認められたが、組織上での間質の線維化が残存した。サルコイドーシスでは、本例のように急速に腎機能低下を起こすことがあり、注意が必要である。

2. 多発性結節性肺病変を呈し胃、腎、精巣に病変を認めた悪性リンパ腫の1例

小杉信晴, 加藤伸太郎, 福田吉宏
森 昭憲, 千葉哲博, 大久保雄介
永井 順 (沼津市立)
後藤茂正 (千大)

【症例】78歳, 男性。平成11年7月より左精巣, 精索の腫脹を認め、胸部 X-P にて両側に多発性の結節性病変を認めた。下血が見られ、胃内視鏡にて胃体部大弯に巨大潰瘍を認めた。生検より悪性リンパ腫が疑われた。CHOP 療法を施行し著名な腫瘍の縮小を認め、6コース終了時には殆ど消失した。【結語】肺のリンパ腫病変は多彩な発症形式をみせ、結節性病変を呈する例もあり鑑別診断のひとつに考える必要がある。

3. 腎原発悪性リンパ腫の2例

千葉哲博, 小杉信晴, 鐘野勝洋
永井 順 (沼津市立)
渡邊純一郎 (清水厚生)
後藤茂正 (千大)

死亡例において、悪性リンパ腫の腎浸潤は33~63%と決して少なくないが、原発性ものは稀である。我々が検索した限りでは、腎原発悪性リンパ腫は62例（自験例含む）である。症例1は52歳, 男性。主訴は肉眼的血尿。尿細胞診にて発見されたが、治療抵抗性で、皮膚、心嚢、膀胱に浸潤し第129病日に死亡した。症例2は83歳, 女性。主訴は発熱。左腎腫瘍の生検で診断された。CHOP 療法を行い、画像上著明な腫瘍縮小を得ている。組織型は両症例とも NHL, diffuse mixed, T cell type であった。腎原発悪性リンパ腫は予後不良とする報告が多く、症例の蓄積、治療法の検討が必要である。

4. 特異な画像所見を呈した悪性リンパ腫の1例
—特に脾所見を中心として—

前田日利, 真田昌彦, 高橋万里子
小出明範, 明星志貴夫 (川鉄千葉)

我々は、視力低下を契機に発症した Anaplastic large cell lymphoma の1例を経験した。腹部超音波では脾全体が腫大し径5~10mmの low echoic lesion を多数認めた。主脾管の拡張は認められなかった。腹部造影 CT では肝及び脾の腫大と、脾にわずかな結節性病変を認めた。悪性リンパ腫の脾病変は剖検例の1/3から1/4に認めるとしているが、過去5年間の文献でこのような脾多発隆起性病変の報告はなかった。